
希少保護生物指定女子。

葉名

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

希少保護生物指定女子。

【Nコード】

N0980Z

【作者名】

葉名

【あらすじ】

……おかしなことになりました。翌日のテスト勉強に飽きて世界史の教科書を枕に居眠りした女子高生・夏妃は、目覚めると見知らぬ森の中にいた。そこで出会ったのは森のクマさんではなく、大きな図体のドラゴンさん。黒髪イコール黒龍のお子様と勘違いされ、自分は人間だと訴えるも、「ニンゲンとはなんだ？」と不思議がられる始末。どうやら目覚めた場所は人間の存在しない世界であるらしかった。この世にたった一人のヒト科女子、希少生物に指定され、ドラゴン（龍）に保護されています。

1 (前書き)

初登校です。いや投稿です。

拙く、文章にお見苦しいところもあるかと思えます。気になるところがあればご指摘いただければありがたいです。

それでは、サバサバ異世界ライフ目指して、行けるところまで行ってみます。

寝起きの耳に届く小鳥のさえずり。梢を揺らす風の音。

こんな「THE・爽やかな朝」とタイトルが付きそうな目覚めは、15年の人生で初めてだ。

とはいえ、あんまり気分はよくない。柔らかいといっても土の上に寝そべっていたので全身がちがちだし、髪の毛にも土や落ち葉がくっついている。どちらかといえば不快だ。

やれやれと体を起こして背中やら髪やらを払う。頭上を仰ぐと、枝葉の間からまだ弱々しい陽の光が差し込んでいた。

さて、と夏妃^{なつき}はここでようやく現状を確認する気になった。

そのいち。着ているものは部屋着代わりのくたびれたTシャツとジャージ。これは記憶にある通りだ。風呂上りに着て、部屋に戻ったそのときのまま。

そのに。たつた今まで自分の頭があつた位置に、付箋を貼られた本があつた。サイズはA5版。それなりの厚さで、枕にちょうどいい。タイトルは、『新版世界史B』。これも覚えていて。明日が高校に入って最初の定期試験で、その初戦が世界史なのだ。いや、もう「今日」だろうか。とにかく、夏妃は徹夜でその追い込みをしていた。

そのさん。周りを見回してみる。濃い緑色をした広葉樹が生い茂り、下草も勢いよく繁茂している様子はまさに初夏の森の中、といった様子だ。しかし、こんな場所には覚えがない。夏妃は自分の家の、自分の部屋にいたはずなのに、一体何がどうなってこんな場所

にいるのか。

来ている服と世界史の教科書のほかは自分の持ち物らしいものが見当たらず、靴さえ履いていない。まあ、部屋の中にいたのだから当たり前だけれど。とりあえず教科書を拾い上げて付いた汚れをばたばたと払った。それをなんとなく胸に抱えて、考え込む。

さて、これからどうすべきか。

この森が深いのか、それとも人里に近いのかもわからない。迷子になったときの基本といえば「その場から動かないこと」だけれど、夏妃を迎えにくる人物などいるのかどうかの問題だ。そもそも誰が何の目的で、こんな真似をしたのか。

頭に巢食う嫌な想像を追い出すべく、すーはーと大きく息を吸って吐いてみる。できるだけゆっくりと、吸うよりも吐く時間を長く。気持ちを切り替えるときに有効だと、何かの折に教師が言っていた方法だ。気休めみたいなものにもすがりたい心境だった。

4

ばくばくいつっていた心臓が落ち着きを取り戻してきたところで、とにかくこの最初の場所を見失わない程度に森を探ってみよう、と決めた。じっとしていても怖い想像が膨らむばかりで良いことがない。迷ったら行け、が夏妃の信条である。

しかし。

自分を奮い立たせて腰を浮かせたその時、地響きが聞こえてきた。地震？と動きを止めたが、確実に大きくなるそれは規則的で、何か意志を持ったもののように思えた。例えばそう、SF映画で怪獣が歩く音がこんな感じではなかったか。

ある日、森の中。

ふと、童謡のメロディが頭に浮かんだ。緊張感のなさに自分で呆れたが、もしかしたら防衛本能なのかもしれない。逃げようという気にもなれず、中途半端な姿勢のまま音のする方向をじっと見つめる。さつきせつかく収めた動悸がまた耳についた。

やがて、視線の先の木立から小鳥が一斉に飛び立つ。甲高く鳴き交わす声と木が軋む悲鳴のような音とともに、森の奥から現れたのは。

どの樹木より高い背丈。眼光鋭い大きな眼。鹿に似た銀の角は美しく、体を覆う翡翠色の鱗とともに朝日をはじいて光る。

夏妃は、我が目を疑いながらぼかんと口を開けた。

途方もなく巨大なその姿は、残念ながら【森のくまさん】ではなく。

「森色のドラゴンさん……？」

目覚めた見知らぬ森の中。夏妃が初めて発したのは、そんな気の抜けた台詞だった。

呟くような声だったはずだがよほど聴覚が鋭敏なのか、ドラゴンはぴくりと片耳を動かして、確実に夏妃を見つけた。

夏妃のごぶしより大きいであろう眼に捉えられてさすがに危機感を覚える。

ドラゴンはぱしぱしと瞬きすると、さらに夏妃のほうへ近づいてきた。騒々しく音を立てて折れる枝葉の様子が不安を煽った。

幸い危惧したように踏みつぶされることはなく、代わりにほろ高みにあったドラゴンの頭がぬつと降りてきた。間近で見ると茶色の瞳は意外に穏やかで、心臓が引きつりそうな恐怖がわずかに和らぐ。

どちらにしろ、ここまで近づかれたら逃げる暇などないだろう。

諦め半分、興味半分で目の前の巨大な顔をじっと見ていると、ドラゴンはやけに可愛らしいしぐさで首を傾げた。

「驚いた。君は、黒色「黒く黒く」かい。そんな珍しい仔が生まれたなんて話は聞かなかつただけだな」

びつくりして、ぱくぱくと口を動かすが声にならない。信じられないが、絶対にこのドラゴンが喋っていた。恐ろしく歯並びのいい口が合わせて動いていたし、声もそこから聞こえてきた。

穏やかで呑気そうな声は若い男性の声に聞こえた。それがドラゴンから、しかも日本語で聞こえてくるというのが解せない気がする。恐怖より興味が勝って、つい言葉が漏れた。

「ドラゴンって喋れるんだ。RPGみたい」

「……喋らずにどっやって意思疎通するんだい？ あーる……って何だ？」

訝しそうにだが、ドラゴンはちゃんと応えてくれた。どうやら言葉は正確に通じているようだ。いきなり喰われる心配もないらしいと分かってほっとした。

「RPGっていうのはロールプレイングゲームの略で、勇者が魔王やらドラゴンやらの大ボスを倒すのがだいたい最終目的な感じのゲームですよ。ゲームの中でなら、ドラゴンが喋るのも不思議じゃないんですけどねえ」

安堵したついでにぺらぺらと説明を加えてみたが、ドラゴンは首をひねるばかりだった。

「おかしなことを知ってる子どもだなあ。それは新しい発明か？ 君は大陸のほうから来たの？」

「出身は極東のちっちゃい島国ですけど、その大陸っていうのは……。あー、ちょっと待ってください。首が痛くなってきた」

頭を仰向けて話しているのがつらくなって、首の後ろを手で揉みほぐす。すると、ドラゴンはたった今気が付いた、というように瞬いた。

「そうか、すまない。この姿では話しづらかったな」

そう言うなり、ドラゴンの姿が掻き消えた。今まで見えていたのが幻だったんじゃないかというほど、それはそれはあっけなく。

あまりの事態にまさかおかしいのは自分の頭なのでは……と不安に襲われていると、「こっちこっち」と緊張感のないドラゴンの声

がした。がさがさと藪の中から現れたのは、背の高い若い男。思わず素で訊いていた。

「どちら様ですか？」

「は？ さっきまで話してた相手を忘れたの？」

きょとんとして返された声は、確かに緑色のドラゴンと同じもの。

「……小さくもなれるんだ」

もはや諦めの境地で力なく呟く。

不可解そうに首を傾げる青年のしぐさは、ドラゴンと同じだった。

緑色がかつた濃い銀色の髪は見たこともない不思議な色合いで、目を引いた。整った顔立ちは東洋風だが、焦げ茶の瞳は日本人とは比べ物にならないほど明るく澄んでいる。簡素なシャツとベストとチノパンぽい服装だけでは、なに人なのだかわからない。

この青年がさっきまでドラゴンの姿をしていただなんて、まったく正気の沙汰ではないと思うのだけれど。

「変化へんげも知らないなんて、変な子だなあ。龍ならどんな親でも教えることなのに。見たところ尻尾も牙もないし、眼も銀色じゃないし。君は龍だよな？」

ものすごくおかしいことを聞かれた。とっさに反応を返せないほど驚く。

「……いやいや、まさか。私はただの人間ですよ」

まったく、とんだジョークのセンスだな、と思っていると。

「ニンゲン？ ニンゲンって何だ？」
「はあ？」

その反応こそなんなんだ、と相手をじっと見るが、「冗談を言っている風では全くない。

つまり何か。このドラゴンさん、いや自分で龍って言うてるから龍さん？ の知る限り「人間」なる者はいない。つまりここは、人間の存在しない異世界だとしても？

……。

特撮物の怪獣よろしくでっかい生き物が現れた時から嫌な予感はしていたけれど。幸か不幸か、どうやら定期試験の心配をしている場合ではなくなったらしい。

いや絶対、幸ではないけど。

これはおかしなことになった。と、ここではじめて真剣に考えた。とりあえず、まずは確認せねばなるまい、と真顔で両頬をつねってみる。青年は目をぱちくりさせた。まあ、気持ちはわかる。

けっこうな力を込めてみたが、痛いだけで目が覚めることはない。

結論。

「これは現実で、私は人間が存在しない代わりに龍は存在するへんてこな異世界にいる」

口に出してみると、こんなバカな話があるか、という気分になった。苛立ちそのままに青年を見た。

「ここはどこ？ 国とか地域とか、名前はあある？」

青年は戸惑った風だったが、すぐに答えてくれた。

「ここはシルウア島の東、緑龍の村の近くの森だ。島は龍族の王が治める龍の国の配下にある。国の名はない」

「さっき大陸がどうか言ってたけど、大陸の名前は？」

「俺は知らないな。もしかしたらあるのかもしれないけど、大陸は一つきりだから『大陸』と呼ぶだけで用は足りてる」

やはり、夏妃の知る世界とは違う。無駄なことだと知りながら、手にした教科書の最初のページを開いて彼に見せた。

「この世界に、この地図と似たところはある？」

細かく国名が書き込まれた世界地図をもの珍しそうに覗き込んで、しかし青年は首を振った。

「いや、こんな形の島も大陸も見ることがない。ここに書き込んである模様は文字なのか？これも見たことがないよ」

決定的だった。教科書を閉じて、だらりと手を下ろした。混乱を通り越して、やけに冷めた頭で考える。なぜ、こんなことになったのだろう。

半ばやけ気味に、青年を睨むように見て訊ねた。

「貴方から見て、私はどう見えます？」

青年はあっさりと、けれど真摯な口調で答えてくれた。

「ニンゲンとやらは知らないが、俺には君は龍に見えるよ」

まったく、何の冗談なのだか。ファンタジーな生き物にお仲間認定される日が来てしまつとは。

はつきりとした青年の答えを聞いて、むしろ肩の力が抜けた。ため息をついて、まずは彼に向かって頭を下げた。

「ごめんなさい。混乱して、失礼な態度を取りました」

完全に八つ当たりだった。彼に嘘やごまかしを口にした様子はないし、相手にしてみれば寝耳に水の話だったろう。

それでも青年は柔和に微笑んだ。

「いや、気にしてないよ。ただちょっと確認したいんだけど、君は本当に龍じゃないの？」

「違います。だいたい、貴方みたいに変身とかできないし」

「それは幼いからでは？ 成獣前に変化できないことはそうおかしいなことじゃないよ」

そついつ認識になるのか……。というか。

「あの、龍に換算すると私っていくつくらいに見えるんですか？」

彼の言い方だと完全に小さい子ども扱いに聞こえるのだが。

青年は夏妃を上から下まで眺めて、おおざっぱにだけど、と前置き付きで答えた。

「だいたい、生まれて5、60年ってところかな」

……………はい？

「……えつと、龍の成人、いや成獣？つて生まれて何年くらいですか？」

「まあ個体差はあるけど、100年前後だよ」

つてことは、100歳が20歳だと換算して、えーと100:50=20:xとすると50歳は10歳？(キリのいい数字で助かった。計算は算数時代から死ぬほど苦手だ。)

『さすがは龍、とんでもない長寿だな』と感心するべきか、『え、10歳？ほんとに子ども扱い？』と戸惑うべきか悩む。

本当の年齢を説明すべきだろうか。でも15歳つて龍だと幼児なのでは。それはさすがに、ものすごく嫌だ。迷ったが、あとで都合が生じても困るので、やはり説明を試みることにした。

私は15歳です、でも人間と龍の年の取り方は違うようなので、私は龍で言う75歳(これはちょっとタイムをもらって地面と小枝で筆算した。重症なのは自覚している)くらいだと思ってください、と訴える。さすがに驚いていたけれど、なるほどそうなんだ、と一応は頷いてくれた。

「それで君は、どうしてこんなところに？」

最も答え辛い質問だった。旨い言い訳も思いつかず、正直に答えるしかないかと腹をくくる。

「それが、気が付いたらここにいたんです。居眠りする前は自分の家にいたはずなのに、どうしてこんな場所にいるんだかさっぱりわからなくて……」

怪しいことこの上ないのは自分でも承知している。勝手に語尾が小さくなった。さすがに不審者扱いされても仕方ないだろう、と覚

悟したのだが、青年の反応は予想と違っていた。

「じゃあ、迷子なんだね？行く当てがないなら、とりあえず俺の村において。知らない場所に一人で、心細かっただろう」

驚いた。初対面の、自分を「ニンゲン」なる未知の生き物と名乗る不審者発言ばかりの相手に、なんとという能天気…いや、親切な申し出なのか。

一瞬やっぱり実は悪党で何か企んでいるのでは…と疑ったほどだ。とはいえ、彼の表情に不自然なところはないし、純粹に親切心から出た言葉なのだろう。

子ども扱いなのは気になるが、龍の基準からすれば庇護すべき子どもにしか見えないのだろうから重ねて否定はしない。それに言うまでもなく、ありがたい申し出だった。

「それは、助かりますけど…。でも、ご迷惑になりませんか？」

飛びつきたいのはやまやまだが、常識的日本人として一度遠慮しないわけにはいくまい。ここでうん迷惑だけど、とか言われたら窮するところだが、青年はお人よしスマイルで否定してくれた。

「まさか。困っている君を放っておくほうが非常識だろ？」

異世界でも人道は生きているんだなあ…とほっとした。いや、人はいない世界のようだけど。今度こそ、ありがたくお言葉に甘える。

「ありがとうございます。お世話になります」

うん、とうなずいて、青年が夏妃に近づいてくる。なんだろう？と思っていたら、急に体が浮いた。いや、超常現象とは違う。青年

に抱き上げられたのだ。しかもまさかのお姫様抱っこで。

「え、え？」

事態に追いつけずに言葉が出てこない夏妃に、青年は呑気な笑みを向けた。

「裸足のまま森を歩いたりしたら危ないでしょ」

「い、いやでも私重いし」

そのうえ死ぬほど恥ずかしい。

「君は羽根みたいに軽いよ。大丈夫、村はすぐ近くだし」

一度は言われてみたかった台詞だが、喜べない。だってこの青年は龍なわけで、相当な重量さえ軽々と持てるんだろうし（想像だけ）。そもそも、羞恥プレイなのに変わりはない。

親切なのは確かだが、どうにもこの青年はズレている。お人よしを絵にかいたような微笑みも、背後になんだかお花畑が見えそうだし、せつかく見目はいいのに天然なのか？龍がみんなこんな感じだったらどうしよう。

と思い悩んでいたら、「あ、そうだ」と青年が思い出したように夏妃を見た。ち、近い、顔が近い。

「そつえば聞いてなかったな。君、名前は？」

失念していたのは夏妃も同じで、はつとした。恩人に名乗ってもいなかったなんて失礼この上ない。

「申し遅れました、椎名夏妃です。夏妃が名前、椎名が苗字」

「シーナ・ナツキ？　へえ、素直ないい響きだね」

それはどうも。ところで貴方は？と聞くと、

「俺はウィリディスアルゲントウムサルトウスルーナ」

じゅ、呪文？

固まった夏妃に苦笑して見せて、青年は付け加えた。

「が本名だけど、不便だしあまり使わない。みんなウィルって呼ぶよ」

「じゃあ私もウィルさんと…」

フルで呼べと言われても無理だ。安堵が顔に出ていたのだろう、彼が微笑ましそうにくすりと笑う。

「さんもいらない、ウィルでいいよ。やっと成獣したところだし、敬語や敬称はむず痒いんだ」

いやいや、100歳は立派に敬われる対象ですよ。と言ったところで仕方ないんだよなあ、やっぱり…。

「習慣なので、今はこれをお願いします。だんだん直していくので…」

というところで納得してもらおう。ついでに、本当に重さなど感じていないかのようにはさくはさくと森を進んでいく彼に念を押すことも忘れなかった。

お願いですから、村に入る前に下ろしてくださいね。誰かに見られると恥ずかしいので!!

ウィルは不思議そうにしながらも頷いてくれたが、たぶんお年頃のオンナノコの葛藤なんて理解してないだろう。
気疲れしながら、前途多難、と口の中で呟いた。

3 (後書き)

一章は現状確認に終始しました。

計算無能力者は作者のほうなので、ミスがあればご指摘ください。
ほんとに算数からためなので。

約束通り村の入り口近くで下してもらい、木立の間から村のほうを伺う。木組みの家々が並び、窓辺には花が飾られた静かな村で、雰囲気は旅番組で見たドイツの集落に似ていた。

「それで、私はどうしたらいいの？」

隣に立つウイルを仰ぐ。獣型の時ほどではないにしろ、かなりの身長差なのでつらいものがある。それに気付いたのか、身をかがめてウイルが応えた。

「少しここに隠れて待ってて。村長むらびとに事情を話して、君を受け入れてもらえるよう頼んでくる。君は龍族にしか見えないし、その黒髪では目立つから、俺が戻るまで誰かに見られないように気を付けて」

不安が顔に出たのだろう、ウイルは宥めるように笑って見せた。

「大丈夫、龍は情け深い子ども好きだ。君の境遇を聞けばみんな受け入れてくれるよ」

「うん……」

いろいろと複雑なものはあるが、頷いておく。夏妃の頭を撫でてから、ウイルは木立から出て村へ歩いて行った。彼を見送って、息をつく。

身を隠した木の幹に背を預けて頭上の梢を仰ぐと、木洩れ日がちらちらと平和に踊っていた。全部が嘘みたいだ。嘘だったら、良かったのに。

もうひとつため息を落としたところで、近くの茂みが音を立てた。びくりとして、幹を回って身を隠す。

ウイルの忠告が頭の中をぐるぐる回る。まだ、誰かに姿を見られるわけにはいかない。

しかし、続いた犬の鳴き声と現れた小さな影に虚を突かれた。

腕に仔犬を抱いたその小さな男の子は、目を真つ赤にして鼻をぐずぐずいわせていた。ぼてぼてと歩く足元はいかにも危なっかしく、案の定、木の根に足をひっかけてべしゃつと転ぶ。若葉色の目に見る見る新しい涙が浮かび、抱いたままの仔犬が男の子と地面の間に挟まれて哀れっぽく鳴いた。

夏妃は見ていられずつい身を乗り出してしまい、やばい、と思ったのは男の子とすっかり目が合ってからだった。硬直する夏妃を見て、男の子はきよんとした。

「おねえちゃん、どうしてはだしなの？」

え、そこ？

いやいや、それより仔犬が可哀そうだよ。いよいよ苦しそうだった。

仕方なく歩み寄って、男の子を助け起こす。ごみを払ってやった髪はウイルよりも色が淡い緑銀色だ。

男の子は人見知りをするように夏妃から距離を取って、おどおどとこちらを伺う。今さらだなあ、と思いながら夏妃は内心、困り果てていた。実は子どもはちょっと苦手なのだ。

とりあえず、じゃあこれでというわけにもいかないの、穩便に

話をすることにする。

「ええと、大丈夫？ どうして泣いてたの？」

男の子は口ごもってぎゅっと仔犬を抱きしめる。だから苦しそうだったば。

「その仔犬は？」

話のとっかかりのつもりで訊いてみると、男の子は急に慌てだして仔犬を隠そうとした。

「ち、ちがうよ！ ないしょでかたりしないよ！」

……うん、状況がつかめた気がする。

おそらく彼は拾った仔犬を飼うことを親に反対されたのだろう。

そして、諦めきれずに仔犬をかくまえる場所を探していたと。こういう一生懸命なおバカさんは嫌いじゃないよ。

生暖かい気持ちになりながら、しゃがみこんで男の子と視線を合わせた。

「お母さんにだめって言われたんだ？」

男の子はどうしてわかるのか、と言わんばかりに目を大きくして夏妃を見る。そんな畏怖の目を向けられるようなことでもないんだけどね。

彼はぽつぽつと、小さな声で答えた。

「さつきもりであったの。ひとりぼっちでかわいそうだから、おうちにいれてあげたかったのに。おかあさんはもとのところにもどし

てきなさいって……」

言いながら、再び涙目になる。

そう聞くと、なんだか仔犬と自分の現状がよく似ていることに気が付いた。夏妃も森でウィルに拾われて『抱っこ』されて連れてこられたわけだし。……思い出すと羞恥で悶えたくなる記憶だけど。

男の子の腕の中の仔犬は、むくむくの灰色の毛並みに琥珀色のつぶらな眼をしていた。ぴんと耳が立って手足が大きめなところはシベリアンハスキーに似ていなくもない。

夏妃はじつくりと男の子と仔犬を見比べながら考えた。

そして、おもむろに提案する。

「じゃあさ、その仔を私に預けてくれない？　これから村長さんに会いに行くの。お母さんがだめっていうなら、私が村長さんに頼んであげる」

「ほんと？」

途端に目をキラキラさせて、男の子が夏妃を見上げた。

「あれ？」

ウィルが戻ってきたとき、夏妃はちょうど男の子から仔犬を預かって胸に抱えたところだった。

「あ、おかえりなさい」

「どうしてティリオとナツキが一緒に？」

不思議そうに首を傾げながらやってきたウィルを見て、男の子は逃げるようにしゃがみこんだ夏妃の影に隠れた。

「テイリオ。オレアがお前を探し回っていたぞ」

「……知らないもん」

ぎゅっとTシャツの肩口を掴む彼の頭を撫でて、夏妃は立ち上がった。

「君はいつたんお家に帰りなよ。この仔はちゃんと私が守るから。」

ね?」

「……うん。やくそくだよ、おねえちゃん」

「うん、約束」

笑いかけると、ようやく男の子も笑みを返してくれた。ウィルが驚いたように二人を見比べている。

「何があつたんだ?」

「ないしょー!」

男の子は宣言して、木立から駆け出て行った。夏妃に向かって手を振りながら走る彼はやっぱり危なっかしい。また転ばないといいんだけど。

ウィルに視線を転じると、不思議なものを見るような眼と視線が合う。とりあえず先手必勝で謝ることにした。

「ごめんなさい、隠れてただんだけど見つかったちゃって」

「いや、それはいいんだけど。あいつ、ひどい人見知りなのにナツキにえらく懐いてたね」

「それはたぶん、内緒の約束の威力です」
「内緒つて、それ？」

指差された仔犬は、琥珀色をした真ん丸の眼でウイルを見上げてきやんと吠えた。

「あの子、テイリオくんだけ？ お母さんに飼うのを反対されて困ってたみたい。飼えるように村長さんに頼んでみようと思って」

ウイルはなんだか複雑そうな顔になった。

「でもナツキ、たぶんそれは……」

止められることを察して、彼の言葉を遮る。

「約束したんだもの、頼むだけ頼んでみるよ。村長さんには会えることになったの？」

「ああ、うん。もう待ってるよ」

「じゃあ行きましょう。この仔のこと話さなくちゃいけないし」

物言いたげではあったが、ウイルは重ねては何も言わなかった。

彼はまたお姫様抱っこを申し出たけれど、それは丁重にお断りした。今は教科書のうえ仔犬も抱いていますので。仕方ないです。

村長の家は、両隣の家と比べても特に変わったところのない木組みの建物だった。目印を挙げるとすれば、玄関の上に掛けられた緑色の籠をかたどったモチーフくらいだ。

ベンチが置かれた広場のような空間に面しているので、早朝とはいえそれなりに視線を集めている。夏妃は、ウィルが用意してくれた藍色の頭巾のようなもので髪を隠していた。これで「黒色」なのはわからないはずだが、視線を痛いほど感じる。

ウィルが玄関のドア横についた紐を引く。中からくぐもったベルの音がしたので、それが来客を知らせるチャイムのようなものなのだろう。間もなく、ふくよかな体格の初老の女性がドアを開けて快活に出迎えた。

「いらっしやい。待ってたよ、さあ入って入って」

彼女がてきぱきと招き入れてくれたおかげで、不特定多数の視線から逃れられてほっとした。女性は夏妃に目を向けると、腕の中の仔犬に気付いて愛嬌のある深緑の瞳を少し大きくした。

「おや、どこかで見たようなルヴトだね。ティリオが拾ってきたのによく似てるが」

ルヴトというのはこの仔犬のことに違いない。いきなり核心を突かれてぎよっとした。身構える暇もなく、彼女は破顔して気安く夏妃の肩をたたいた。

「なるほどね。道理で戻ってきたあの子の機嫌が良かったわけだ。

宥めるつもりで待ち構えてたオレアは拍子抜けしてたが」

「あ、あの……」

「はじめまして、お嬢ちゃん。私のことはシルエラと呼んでおくれ。テイリオは私の孫なんだ」

え、と驚きが声に出た。彼女は40代の半ばほどに見える。龍の結婚適齢期がいくつなのか知らないが、夏妃の感覚からすればずいぶん若いおばあちゃんだ。

「ウイルから大まかな事情は聞いてるよ。さあ、このタオルで足をふいて。怪我はないだろうね？」

甲斐甲斐しく世話を焼かれて対面の身支度を済ませると、シルエラが一つ頷いた。

「よし、これでいいね。長が待つてるよ、こっちへおいで」

隣りのウイルに促されて、すたすと廊下の奥へ歩き出した彼女に続いて部屋に入る。向かって左手にあるテーブルセットに座る老人が立ち上がり、笑顔で彼らを迎えた。

「よく来たね」

ウイルが頭を垂れ、挨拶した。

「無理を聞いていただき感謝します。申し訳ありません、こんな時間」

「いやいや、若い者の訪問を受けるのはどんな時でも嬉しいものさ。年寄りになると寂しくていけない」

夏妃は村長の顔を見つめてぼかんとしていた。

「村長」と聞いて夏妃が勝手にイメージしていたのは、白いひげを垂らした気難しそうな老人だった。たぶん、RPGやファンタジー小説の先人観があったのだと思う。

しかし、実際に目にした「村長」は全くイメージとは違っていた。

淡く緑色が残る白髪はきちんと手入れされ、上品なラベンダー色のシャツとワインカラーのベストを着こなす姿はまさに老紳士と呼ぶにふさわしい。背も高く、無駄のない身のこなしと相まって、さぞかし若いころは美男子だったのだろうと思わせる。

窓から差し込む光で金緑色の瞳が深みを増す。目が合うと思わずどきりとした。刻まれた皺さえ魅力的な、映画俳優並みの彼の佇まいに息を呑んだ。……男性の色気というものはじめて実感した気がする。

呆けている夏妃に、村長はゆるやかに近寄ってきてにこりと微笑んだ。

わあ、悩殺。じゃなくて。

「は、はじめまして。椎名夏妃と申します」

「はじめまして、ナツキ。私はこの緑龍の村で長を務めている者だ。名は、エルヴァデゼリアルパスヴェルデヴィラ。エルヴァと呼んで欲しい」

エルヴァは夏妃とウィルを促して長椅子に座らせた。二人の向かいに彼が腰かけると、シルエラが人数分のお茶と、グラタンに似た料理をそれぞれの前に並べた。ほかほかと湯気を上げる料理を見ているうちに、ようやく空腹を自覚した。腕の中の仔犬も物欲しげにくうんと鼻を鳴らす。

「さ、お前さんのご飯はこっちだよ」

シルエラが夏妃から仔犬を抱きとる。テーブル脇に置いたミルク皿の前に下ろすと、仔犬は夢中で食事でありついた。

エルヴァが声に出して笑い、夏妃たちを見る。

「君たちもどうぞ。遠慮せず、年寄りの食事に付き合ってくれないか」

彼の自然な紳士ぶりには本当に頭が下がる。この短時間でファンになりそうだ。

ちらりとウィルを伺うと、彼も微笑んで頷いてみせる。ではありがたく、と教科書を膝に置き、頭巾に手をかけて背中に落とした。

ほう、と息をつく音がふたつ部屋に響く。視線を上げると、エルヴァと傍らに立つシルエラが感嘆の眼差しで夏妃を見ていた。

「……これは、驚いた。本当にきれいな黒色だ」

「ええ、こんな色にお目にかかれる日が来るとはねえ」

たじろぐ夏妃と目が合うと、二人は我に返って慌てた。

「すまない、不躰だったね」

「いいえ。ご飯、いただきます」

ごまかすように笑って、フォークを取り上げて料理に手を付ける。失礼にならない程度に観察してみたが、こんがり焼けたチーズの下の野菜はブロッコリーやジャガイモに似ていて、味もそう変わらなかった。しいて言えば、知っている野菜より柔らかくて甘みが

強いことくらいか。

シルエラと目が合った。

「すごくおいしいです」

素直にそういうと、シルエラは応えて嬉しそうに笑った。

「そうかい。食後にケーキもあるからね」

「楽しみです」

ほのぼのと食事を進めて人心地つくと、お茶を一口飲んでテーブルに戻したエルヴァがさて、と切り出した。

「さっそくだがナツキ、詳しい話を聞かせてもらってもいいかな」

途端に緊張が舞い戻ってきて、固い声で答える。

「はい」

「緊張しなくていいよ。君のわかる範囲で構わないから」

柔らかな言葉には彼の気遣いを感じる。それでも、荒唐無稽だと自分でも思っ話語るのには簡単ではなかった。

ただたどしく経緯を話すと、エルヴァは難しい顔になった。

「この世界の者ではない、か。私もニンゲンという種族のことは聞いたことがないな」

「そうですか……」

見るからに博識そうなエルヴァでさえ知らないということは、この世界に人間が存在する可能性はゼロに等しいと思っていだろうか。異国人の見た目とはいえ、龍族の彼らの容姿は夏妃の知る人間にしか見えないのだから、悪い冗談のようだ。

申し訳なさそうに、エルヴァは眉を下げる。

「ニホンという名の国も、おそらく存在しないだろうな。大陸の辺境のほうや魔族、妖族との交流は少ないから彼らの領域ならわからないが」

「でも、ナツキは龍族にしか見えないんですよねえ」

シルエラが注ぎ足していつてくれたお茶を口に運びながら、やはり深刻味のない声で言ったのはウィルだ。

「私から見たら龍族のみなさんこそ人間にしか見えませんよ」

巨大な龍に変身しなければの話だけねど。

エルヴァは考え込むように顎に手をやった。

「それなら、ニンゲンと我々には何か近いものがあるのかもしれないな。……ナツキ、君は元の世界の地図を持っていると言ったね」

「はい。これです」

教科書を広げ、世界地図のページを開く。

エルヴァと一緒にウィルも覗き込み、二人して唸った。

「大陸の数も形も、表記文字も違う。やはり、別物の世界だと思うたほうがいいだろうな」

「それにしても、こんなにたくさん国があつてよくまとまっているな。それぞれに王がいるのか？」

ウィルに訊かれ、夏妃はそう多くない世界史の知識を絞り出す。

「この本は世界史の教科書なので、乗っている地図も昔の国の様子を表しているんです。今は植民地から独立したりして、もっと細かく分かれてますよ。王制じゃない国もたくさんあります」

「シヨクミンチ？」

「ええと……。強い国が弱い国の資源とか土地とかいろんなものを目当てに、軍事的に攻め込んで支配下に置いた土地、かな。昔は少ない列強が、世界中の地域を分割して支配してたみたいです。すみません、あんまり詳しくは知らないんですけど」

自信のなさが勝手に語尾を小さくする。

「では、王制じゃない国というのは？」

「いろいろですね。議会が権限を持つて統治してたり、国民が選挙で選んだ代表が政治のことを決めてたり。私の住んでいた国は、国民の代表である国会が国家権力の最高機関だと認められている、議会制民主主義ってやつでしたね」

「……難解な言葉が多いな、ナツキの世界は」

半ば呆れるようにウィルが呟いた。興味深そうに聞いていたエルヴァは、真剣な顔で頷く。

「しかし、ナツキの話は筋が通っている。理にかなった政治形態もある、かなり先進的な場所なのに違いはない。この世界にそこまで進んだ文化があるのかはわからないが……」

エルヴァの金緑色の瞳が夏妃を見て和らぐ。

「ナツキ。帰る術が見つかるか、この世界にほかの居場所を見つけるか。その時が訪れるまで、この村で暮らしなさい。我々が君を保護しよう」

「保護？ …… ちょっと、待ってください」

夏妃は抱えていたカップを慌ててテーブルに戻した。

「私が言うのも失礼ですけど、不用心すぎませんか？ 私が異世界人だなんて根拠も、嘘をついていないっていう保証もないでしょう。今の話を全部信じるんですか？」

「信じがたいのは確かだよ。異世界や君の言うニンゲンというものの存在も、俺たちには知りようもない」

やんわりと答えたのはウィルで、夏妃は彼に視線を移した。

「なら、どうして『人間』だなんて言い張る私を受け入れてくれるの？」

「知らないからだよ」

思ってもみなかった答えに、声を失う。ウィルは、飽くまで能天気そうに微笑んだ。

「俺も村長も世界の果てまで知ってるわけじゃない。知らない場所のどこかに君が言うニンゲンの国があったって不思議じゃないだろう。あるいはどこかで、ナツキの世界と地続きにつながっていたりするのかもしれない。それを確かめたことはないんだ。ナツキの言うことが嘘だという根拠を俺は持っていない。ただそれだけだよ」

呆然と、ウィルを見つめ返すことしかできなかった。言葉が出てこない。のろのろと正面を向くと、目が合ったエルヴァが穏やかに頷く。

隣りでウィルが茶化すように付け足した。

「龍は情け深い子ども好きで、加えてお節介だ。一度角を突っ込んだら絶対に引かないから、覚悟したほうがいい」

夏妃は一瞬ぼかんとして、その後思わず嘔き出した。

「角？ そっか、龍だからか。人間はそういうとき、首を突っ込むって言うの」

「へえ、似てるけど違うのか。面白いな」

空気が一気に緩む。足元に柔らかなものを感じて見下ろすと、さつきまで部屋の中をうろつくと歩き回っていた仔犬がすり寄っていた。膝に抱き上げると、手を逃れて夏妃とウィルの間のクッションに陣取り、さっさと寝転がる。

その頭を撫でながら、夏妃はエルヴァに申し出た。

「ひとつだけ、お願いがあります。私と一緒にこの仔のことも受け入れてもらえませんか」

「そのルヴトを？」

気持ちよさそうに目を細めてうとうととしている仔犬を見て、エルヴアが瞬きする。

「約束なんだそうですね。もとの拾い主との」

ウィルが付け足す。エルヴアは納得したように何度も頷きながら、それでも思い悩むように仔犬を見つめた。

厚かましいお願いだっただろうかと不安になりかけていると、エルヴアがウィルに尋ねた。

「ウィル。お前はと思う？」

「俺個人としては、彼女の希望を叶えてやりたいですけどね」

反応を探るようなエルヴアの問いかけに、ウィルはなんでもないことのようにあっさりと答える。するとエルヴアも苦笑しながら了承した。

「わかった。それなら任せよう。ナツキ、君とともにそのルヴトも村に受け入れる」

「あ、はい。ありがとうございます」

彼らのやりとりにどんな意味があるのかわからないが、とりあえずテイリオとの約束は守れたようだ。ほっと息をつくど、ドアが開いてシルエラが明るく声をかけた。

「小難しい話は済んだかい？ さあ、ケーキが焼きあがったよ」

部屋に甘いにおいが立ち込めて、不思議とまた食欲が湧いてくる。

立ち上がって彼女が押すワゴンに近づき、配膳を手伝った。

「すごい、おいしそう!」

はしゃぐ夏妃とは対照的に、男性陣はテンションが低い。

「シルエラ、また黒キルシエのケーキかい？ 朝から重たいものは年寄りの胃にはつらいと何度も……」

「俺も甘いのはあんまり……」

シルエラは彼らをぎっと睨み、大げさにため息をつく。

「まったく、料理する甲斐のない男どもだね。ちょっとはナツキを見習ってほしいもんだ」

「一週間も同じデザートが続けばうんざりもするよ……」

「ウィル。そういえば一昨日コルナリナから手紙が届いてね。『愚息が無礼を働いていないか』と心配して」

「ごめんなさい。嬉しいな黒キルシエ大好きだ」

棒読みで言っただけ皿を受け取り、沈痛な面持ちでケーキを見つめる青年の姿は一種異様だった。エルヴァは余計な口を挟まずに、見た目は平然とお茶を口に運んでいる。どうやら小柄で快活な印象のシルエラが、この場では最強のようだ。

一方で、会話の中の新たな名前に首を傾げる。

「コルナリナさん、って誰ですか？」

「ウィルの母親だよ。コルナリナと私は幼馴染だね。武者修行の道中に持たま手紙をくれるんだ」

……武者修行？ なるほど、なんだか力強そうなお母様だ。

夏妃は自分の分の皿を手長椅子に戻ると、フォークで柔らかい生地を崩し口に運んだ。煮詰められたジャムのような果実の甘みと酸味が口の中に広がり、自然と頬が緩む。

その様子を眺めながら、シルエラは満足そうに頷いた。

「男どもがなんて言おうが、女の子が笑うんならお菓子は正義だよ」

彼女のその言葉に反論できる者はいなかった。

とにかく龍の村に受け入れられることになった夏妃だが、またひと悶着あつた。

ケーキを一切れぺろりと平らげた夏妃に喜んだシルエラは、おかわりを皿にとりわけながら上機嫌だった。

「この村に住むならうちで暮らしなさいな。歓迎するよ」

「シルエラにまで懐かれたね、ナツキ。この家に住めばとりあえず黒キルシエのケーキには間違いなくありつけるよ」

ケーキを崩すだけで手を付けずにため息をつくウィルは、シルエラに笑顔で睨まれて苦笑した。

「でも、いいの？ 今でさえここは大所帯なのに」

「失礼だね。ナツキを養うくらいに余裕はあるさ。それともウィル、あんたがナツキを引き取るとでも言うのかい？」

不服そうなシルエラに、ウィルは平然と頷いた。

「うん、そのつもりだったんだけど。だめかな？」

夏妃は驚いて顔を上げ、ウィルを見た。シルエラも目を剥いて彼を凝視する。

「……………本気かい？」

「ナツキを拾ってきたのは俺で、村長に保護を依頼したのも俺だ。その責任をとるのは当然だと思っけど」

「でも、ウィル。私はもう十分良くしてもらったよ。これ以上迷惑は……」

夏妃が口を挟むと、ウィルは首を振った。

「責任って言い方は押しつけがましかったな。俺は、ただの義務感から言ってるわけじゃないよ。ナツキと話して良い子だと思っただし、君と暮らすのも楽しそうだと思っただから、こうして申し出てる。幸い一人暮らしでスペースは余ってるしね。もちろん、決めるのは君だ」

判断を委ねられて戸惑う。

確かに、他の民家と変わらない大きさのこの家がすでに大所帯だというなら、夏妃がそこに加わるのは負担だろう。しかし、シルエラが心から夏妃を気に入ってくれていることも、その負担を厭わないだろうこともわかる。

ウィルの申し出も嬉しかった。好感を持っているのは夏妃も同じだ。ただ、一方的に面倒を見てもらってばかりなのは気にかかる。

夏妃は考え考え、彼に向かって口を開いた。

「私は、確かにこの世界では頼りない迷子だけど。それでも、何もしないで面倒だけ見てもらってというのは嫌なの」

それは、この世界に立っていることを覚束なくさせる気がする。ウィルは応えて笑う。

「うん。じゃあ、この村でナツキができることを探そう」

彼の言葉にほっとして頷く。シルエラが、残念そうに呟いた。

「やれやれ、振られちまったね。せつかく可愛い孫が増えると思っただのに」

「シルエラ、それでは子どもが拗ねているのと一緒にだ。……だが、同感だな。私も可愛いひ孫が欲しかった」

おどけるようにそう言うシルエラとエルヴァを見比べて、ずっと気にかかっていたことを聞くことにした。

「あの。もしかしてお二人って……」

エルヴァが瞬いて、ああ、と笑み崩れる。

「言い忘れていたな。そう、シルエラは私の一人娘だよ」

察してはいても、はっきりとそう聞くとやはり驚く。よく見れば、確かに彼らの笑った目元や仕草などには似通ったところがあった。

「私はね、高嶺の花の次期村長に惚れぬいた、平凡な村娘だった母親に似たのさ」

シルエラが言い、エルヴァが懐かしむ目をした。愛しい相手を想う彼の表情はやはり魅力的で、見惚れるほど柔らかい。

「頑固で料理好きなところはシルエラと瓜二つだったな」

「はいはい、母親と違って料理の幅が狭くてすみませんね」

軽口を交わす二人の間の空気は、慣れ親しんだ家族の間合いだった。

見ているうちに自分の家族が思い浮かび、感傷的になる前に胸の

奥に押し込める。今は考えてもどうしようもないことだ。

「ウィルに栄養管理は期待できないからね。食事の時間は家において」

彼に張り合うみたいにならなくてくれるシルエラに救われる。

それにしても、エルヴァとその奥さんのエピソードは壮大なロマンスの気配がする話だ。いつか、詳しく訊こうと思う。

楽しい決心を胸に刻んだところで、表情を改めたエルヴァと目が合い、背筋を伸ばした。

「では、この村で暮らすうえで大切なことを話そう。

ナツキ、申し訳ないがここでは、龍として暮らしてほしい」

突然、心臓に重石を乗せられた気分だった。

「……嘘をつくんですか」

混乱のあまり、かえって声が平静になるのが不思議だった。ウィルが宥めるように言う。

「ナツキ。君は魔族でも妖族でも獣でもない。何しろ前例のない存在だ。それなら龍として扱うのが一番いい。ナツキの見かけは龍にしか見えないんだから」

「でも、私は龍じゃない」

頑なな夏妃に、エルヴァが真摯な目を向ける。……その目はずい。

「君を否定するような、ひどい提案なのはわかっているよ。だが、

「ここは身寄りもなく、どの種族にも属さずに生きていけるほど穏やかな世界じゃないんだ。私たちは、龍のルールの中でしか君を守れない」

夏妃は反論できずに唇をかんでうつむく。エルヴァの気遣いがにじんだ声が胸に沁みだした。

「何も、ずっと嘘をつき続けるわけじゃない。どちらにしろ、表向きは龍族だとして扱っても、我々には領内の異変は龍の王に報告しなければならぬ義務がある。その報告で嘘をつくことなどできないから、王にはナツキについて本当のことを言うしかないんだ。その後のことは、王のご判断と君の意志に依ることになる」

それでも、突然「実は人間なのだ」と言い出せば混乱を招くことは想像がつく。はたして王がそんなことを許すだろうか。

「龍の王さまは、私を危険なものだとみなすかもしれない」

龍は情に厚いと言うが、不審な者を安易に受け入れては為政者失格だ。

「もちろん、その可能性も含めて、王は公正な判断をなさるだろう。だが私は、ナツキなら大丈夫だという気がするよ。それに龍の王は、「黒色」を無下にはできない」

夏妃はつい、胡乱な目を彼に向けた。

「詳しく聞いていなかったですけど、「黒色」ってどうしてそんなに特別扱いされるんですか？」

公平じゃないと思う、と口をとがらせると、ウィルが吹き出した。

「特別扱いされて怒るなんて、ナツキは変わった子だな」

「聞こえはいいけど、それって差別でしょう?」

冷たくウィルを睨むと、エルヴァが苦笑した。

「不快にさせていたならすまない。だが、龍の中で黒が特別なのは事実だ。あれを見てごらん」

そう言っただけで示された小棚の上の壁には、横長の額が飾られていた。その中には色が違う4つの龍のモチーフがある。村長の家の玄関に掛かっていたものと同じ意匠デザインだった。

「龍族には緑、赤、青、黄の4種族がある。それぞれ気性や暮らす地域に違いはあるが、基本的に情が深く身内を大事にする性質だ。

そう、それに子ども好きだな」

「……それは何度も聞きました」

エルヴァは楽しげに笑って続ける。

「そして、どの種族にも属さないのが王族。龍の王は代々白龍で、王族以外に白色は生まれない。それと同じで、一族を持たないのが黒龍だ」

「珍しいんですか?」

「希少だよ。正確なところはわからないが、記録に残っているのは1頭だけだ」

たった1頭。

「それだけ……」

「彼は、ずっと昔、龍族を支配しようと侵略した魔族との戦争の英雄だった。劣勢に追いやられた龍の王の下に現れ、力を貸した。疲弊した龍族を鼓舞し、万の魔族を倒し、遂には魔族の王を退けたと言う。祝祭では定番の、子どもたちが演じる劇の有名な演目だ」

そういう風習はどんな世界にでもあるものらしい。だが、「英雄」という言葉はなんとも作り物くさい。

「それは、本当に実在した龍なんですか？」

「史実書に残っているし、赤龍の長老が幼い頃に会ったことがあると言っていた。あれももう2000歳近い化け物じみた方だからなあ」

呆れる風に言うが、それ以前にありえないだろう。龍の年齢は人間の5倍。ということは、人間換算でも400年近く生きているということになる。

さすがは龍。人間の常識では測りきれない。異世界の不思議を今さら再認識した。

「だから黒龍はほとんど神聖視される希少生物だ。「黒色」自体珍しいんだ、ナツキがニンゲンだと分かったところでそんなに差はない。どちらにしる、龍族にとって保護する意義がある存在なんだよ、君は」

希少生物。保護。

レッドリストに載る野生動物になった気分だ。動物扱いが嬉しいわけではないけれど、ここまで話がぶっ飛んでいると怒りも湧いてこない。

ヒト科ニンゲン属準黒龍種、学名シーナ・ナツキ（）。希少保護生物に指定されてしまいました。

冗談のつもりでそんなことを思い浮かべてみたが、頬が引きつるばかりだ。

笑えない。なにが悲しくて、想像上の生き物のはずの籠に希少生物扱いされているのか。

「めっちゃくちゃだよ……」

力なく呟く夏妃に、ウィルが笑う。

「だから言ったじゃないか。覚悟したほうがいいって」

いつの間にか部屋から姿を消していたシルエラが、妙齢の女性を連れて戻ってきた。淡い銀緑色の髪に少し色の濃い若葉色の瞳。誰かに似ている、と思っていると、当人が彼女のスカートの裾から顔を覗かせた。

「あ、ティリオくん」

「はじめまして、ナツキさん。息子がお世話になったようで」

彼の頭に手を置いて、彼女はオレアと名乗った。優しそうで、それでいて芯の強さが瞳に表れている女性だった。

夏妃は挨拶を返し、ティリオに報告する。

「約束は守ったよ。この仔、飼ってもいいって」

クッションの上で眠る仔犬を示して言うと、彼はぱつと笑みを広げて駆け寄ってきた。

今は寝てるから静かにね、と言うと、神妙に頷いて不器用な手つきで仔犬の背を撫でる。夏妃を見上げて、嬉しそうに言った。

「ありがとうございます、おねえちゃん」

笑みを返す夏妃の隣にやってきて、オレアが眉を下げた。

「ごめんなさいね、面倒をかけたみたいで」

「いいえ。私が自分で申し出たんですから」

オレアが微笑んで、きちんと折りたたまれた衣類を差し出した。

「私のもので悪いけれど、着替えを用意したわ。お湯も用意したから、良ければどうぞ」

「ありがとうございます」

正直、部屋着でいることにはかなり抵抗を感じていたので本当に助かる。彼らの気遣いに感謝だ。お言葉に甘えることにして、風呂場まで案内してもらおう。

説明によると、風呂は薪で火を焚き沸かすタイプらしい。しかし、ひとりになるともの珍しさへの好奇心よりも心細さが勝って、オレアが渡してくれた衣類をぎゅっと抱いた。元の世界との唯一のよすがである教科書も一緒に抱えている。

「これは現実で、夢じゃない。私は異世界で、できることを探して生きていく」

確認するように口に出して呟いてみる。納得のいかない思いは残るけれど、前よりはずっとましな気分だった。

夏妃は意志に刻むように、小さな飾り窓から見える夏の空を仰いだ。

「さて、どうなるだろうね」

「さあ。しばらく様子を見ないことには何ともなりませんよ」

「とにかく、彼女から目を離すな。それがお互いのためだ」

「それはもちろん。上手くやりますよ。できれば、こんな真似はしたくないんですけれどね」

雲が一時、太陽の光を遮る。明度を落とした鈍い光を受けて、焦げ茶の瞳が硬質な色を帯びた。

「すべては、彼女次第です」

再び日射しが現れ、静かな応接室に二人分の影が戻っても、それ以上の会話はなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0980z/>

希少保護生物指定女子。

2011年12月10日13時58分発行